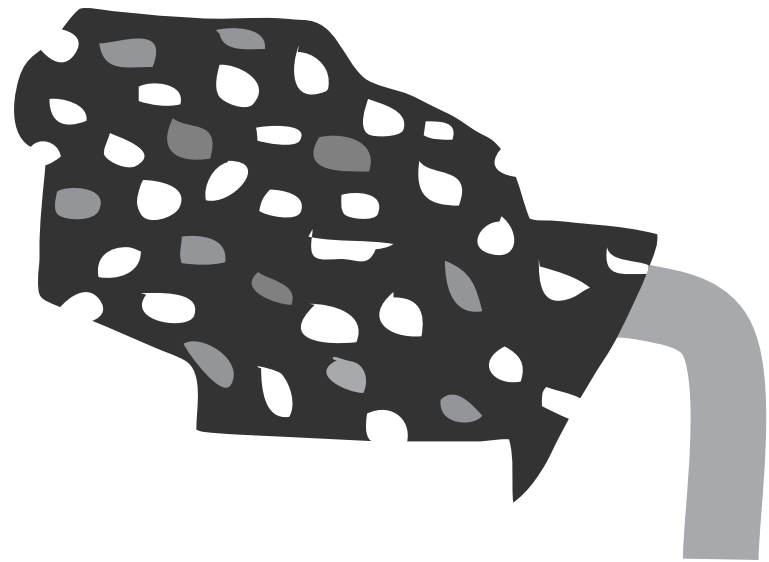

月 刊

MéLange

VOL.83



2013.07.28

詩 / 俳句・川柳・エッセイ

月刊
「MéLange」
VOL.83
★

2
0
1
3
/
07
/
28

月刊
「MéLange」
編集部

銀行員にかぶりつかれるイカ天が台本だろうか
木こりになったジャズマンの座禅そうなん
カルメン故郷に帰らず黒猫を抱く

ひまわり金色まだ歌わないけれど
甕のメダカどこまで泳げばよいのやら
白雲のそのしわくちやを夏と呼ぼう

鎌倉佐弓

夏石番矢

◆吟遊神戸カルメン句会に

2013.7.7

詩・俳句・川柳

83号巻頭作品

吟遊神戸カルメン句会に

鎌倉佐弓／夏石番矢 3

さくらんぼ……………岩脇リーベル豊美 4

冷蔵庫を開ける……………中嶋康雄 5

川柳連作 七夕行列……………情野千里 5

TAM……………高木富子TOM 6

化粧筆……………上野都 7

追悼。あるいは、「燃焼」の二重性から、「打ち割られ」の二重性へ。……………有時秀記 8

シンゾウさん……………大橋愛由等 9

連星……………富哲世 12

生活者……………月村香 12

余はいかにして猫が月の化身であることを信仰するに至ったか……………千田草介 13

あけやらぬ みずのゆめ……………福田知子 14

旅立たれたあなたへ……………川田あひる 16

開かれた日……………高谷和幸 17

ふたつの歌……………野口裕 18

青い服と白い服を着た人たち……………中堂けいこ 19

エッセイ

△詩人通りより▽7 「ヨーロッパにおける一野蛮人(アンリ・ミシヨ)に想う……………岩脇リーベル豊美 15

△さまよいの星座詩学▽3 「獅子座 T・E・ロレンス」……………安西佐有理 10

△神戸詞あしび▽72 「里博氏の在日の叫び 詩集『三島の悲歌』」……………大橋愛由等 20

編集部日より★03／第83回「Mélange」読書会発表担当は、富哲世氏。テーマは、「衰弱の魅力--北村太郎(1)荒地時代まで」。富さんは案内文にこう書きます。「北村太郎は、日本現代詩の中でも特異の存在感と位置を占める大きな詩人であると思うが、その存在感の大きさが如何なるものであるのかを言うことはなかなかむつかしい。彼の詩は終生、向こう受けしたり、才気走ったり、重々しかったりすることから縁遠い。かれは自伝のなかで自分を評して、『衰弱そのものが詩の形だというような詩しか書いていないような気がしました。』と言っているが(「センチメンタルジャーニー」)、生活模様の中にひっきりかき捉えて不思議に思考の輝きはじめるその「衰弱」のことばに孕まれた、詩人のなだらかな違和や傾斜の魅力はなかなか捉えどころがなく、結局、マホーにかかったように詩を味わうことが納得の一番の近道であり、それで充分だと言いたくなってしまふ。」(以下略)〈大橋記〉

◆さくらんぼ

岩脇リーベル豊美

なんでも詩にする
悲境および運命の諸類型
否定することで夏らしくなる
そして
孤独に宙吊りになる
もの狂おしい言葉の羅列
錯乱のさくらんぼ

***レエス

レエスを編むひとの
斜向かい

詩人の沈黙
世界の出口を探す
沸き立つ海に

深紅の唇開けて

忘却の美神が
羊を数えた糸の余韻

墓無しの儂し

***こしかけ

菩提樹の木陰に腰掛けて
呼吸をととのえる
わたしのなかに
誰かが語る半神秘に
耳を傾けていたい

自然律の語りは完了したと
独り合点していた

誤読された象徴こそ真であると
論ず声を

石のように光に濡れて
ずっと聞きたかった声を

新しい星座も
新しい日付もない
誰かの落とし児としての転生
来し蔭

◆川柳連作 七夕行列

情野千里

コイコイ人の言葉で七月は、おぼろ月の季節。湿気と暑さで
月もおぼろに霞むのであろうか？ 陰陽師・蘆屋道満ゆかり
の佐用町江川地区では、七夕行列というものをこなうが、
旧暦7月（8月7日）のこととして歩く女子男子の白塗りも汗
でおぼろに、夏の百鬼が往くがごとくと里人の謂う。

瓢箪ブギでしょ焼けた鉄板の上の
夏は来ぬ 天国の窓ハメゴロシ
薔薇かも知れぬフランス窓かも知れぬ
身八つ口から祇園祭のコンチキチ
まだフランス領だった私のふくらはぎ
豆の蔓伸びて遠野の窓知らず
窓から「こんにちは」何時かの鉢かづき
白髭の房事淡泊ガラス窓
男は蝶になるギリシヤ悲劇の幕間
亡夫ふらりと冷蔵庫の戸を閉めに来る

◆冷蔵庫を開ける

中嶋 康雄

冷蔵庫を開ける。ミドリムシが湧いている。
冷蔵庫を閉める。冷蔵庫を開け直す。ミドリムシが湧いている。こ
ぼれ落ちる。床が緑に染まる。冷たい暗黒の怨念を晴らすように爆
発するミドリムシ。瞬時、ドーム状のコロニーを形成し、のたうち
回るように生長する。
爆発し飛び散るミドリムシ。飛び散った無数のコロニーの切片はの
たうち回る。床をうつ度にムクムクと生長する、飛び散る、生長す
る、飛び散る、生長す
ぼくのベロを触ってごらん。ブツブツがあるのが分かるだろう。ブ
ツブツは光を求めている。口内の狭小な闇を破壊し、光を。だから
いつもモゴモゴモゴモゴモゴモゴ蠢いている。一瞬の休み無く。一瞬の休み
無く蠢かれる宿主の辛さ、ちよつとでも気を休めると、口内のブツ
ブツ内の膿状のものがドロドロドロドロ死ぬまで流れ続けてしま
う恐怖。
スピードか絶滅しか選べないのなら、どうしようもなくスピードを
選んでしまふ。ついに解放され、地球上の床という床をのたうち回
る緑のコロニー

艶やかな夕べの気配 その向こうに捉えがたい美しいうねり あらゆるものがうねっていた 躍動していた モーヴ色の狂気も姿をちらつかせていた

空っぽになつて まつ毛揃えてもらつて
空っぽになつて 合掌して微笑んで

薄明るく汗ばむ午後 熱もつた白い灰と骨になり
浮遊する微塵になつた 冷え冷えと影もたぬ人となつた

わたしたちは マーヤー幻影、よ

白い音が立つ

時は齎し 時は壊し 時は呑み込む

もういいかい まあだだよ

もういいかい もういいよ

もういいかい まあだだよ あなたはダメよ

わたしは今日も食事の支度をしている (幻影には幻影の食べ物が要る)

その日 昼食は筋肉のスープ、バジルソース金目鯛ソテーだった
その午前 既に旅立っていたのを知らなかった

森への道でなく ぬかるみの静かな道でなく

湾曲する海岸線の 港に向かう潮と外国船の匂いがする道だった

道は閉鎖されていた・・・が

通り過ぎてきた虚実の皮膜から向こうへ 境界の微かな薄い膜でした
すり抜けたら分かります やわらかな感触でした

暗夜行路にわたしたという異物があり

いつしか異物は遺物・・・用なきものに変化していました

適応することも 後退することも・・・毀れたのです

翼が生えて ナイルを飛び越す 封印されたもの、その奥の奥まで

見通される いとも楽々と 最奥に獣のごとく咆哮するものたちも

いるが もはや意に介さない 理不尽なものも意に介さない 青い

矢車草も枯れ パサパサ音立てた

◆化粧筆

上野 都

ゆっくりと握る

この指の形は何だ

絵筆をまねて

とろんと長い柄を載せて刷いてみる

下から上へ

頬に沿い

顎に沿い

顔のあるところまで

顔のないところまで

刷けるところを一周したところで知れている

たかが顔一つ

二周して

三周して

ドアを開けてまわる

ヘッドフォンをはずす

剥がれ落ちてくる

あいつ あんた あのひと

上から下へ

もう一周 逆に刷けば

大音響で飛び込んでくる

わたし わたくし こちら

きゅんと差し込む輪郭

じわりと溶け出す輪郭

何の毛だか柔いものに取り憑かれ

ホモサピエンスの樹林をくぐり

デボン紀の湿地を抜けて

目の大きな三葉虫に

化粧筆ばかりが勝手に這いまわり

うっとり

前世とこの世を行き来する

「だれ」という名の代名詞になるまで。

◆追悼。あるいは、
「燃焼」の二重性から、
「打ち割られ」の二重性へ。

有時秀記

巨船の哀悼は永遠に終わらないが、幾たびかの追悼は終わった。水葬された巨船が内海の深淵でとわの幻影となり、沈黙の青が呼んでいる。冷凍された内界に沈む蒼白者の沈黙は、かすかな記憶の結晶を潜在させる。母なるミトコンドリアDNAを内包する古人骨のような記憶は、枯れた面影を幽霊に託して真実の時を待ちわびるのだ。幽霊は堅いクルミの殻を酸素のまばたきで打ち割り、殻の内側から打ち割られた鏡を登場させる。その鏡の裂け目から現われる青い真珠は、沈黙の青のひとつの形であり、包み隠していた青薔薇の青の生成を促すだろう。

打ち割られるクルミ、打ち割られた鏡、この入れ子構造の二重性を帯びた「打ち割られ」が、冷凍庫に格納された沈黙の内言を解凍し、生成を保証する。その生成の時にこそ、幽霊の声の記憶が、光る内言となり、新世界の住み家を打ち建てるだろう。なつかしい内言は光りながら逃亡先から帰還し、沈黙の青をおびただしく発しながら、「それはそこにある」という母なる幽霊の声とともに青い住み家を打ち建てる。そのときあまたの流星が、内海に融け沈んだ灰の痕跡をもうひとつの青い星の故国に運んで行くだろう。

中性者に電波を発しながら内海を進みゆく母なる巨船が燃える。燃え落ちる船は灰となって海に融け沈み、灰の溶融に激しく震える中性者はレム睡眠の夢から覚めて蒼白となる。月は暗くかげり、世界そのものであった住み家の中心柱も激しく燃え落ちる。この燃焼のシンクロニシティ、この二重性は、住み家に生息していた中性者の内言を青ざめさせ、燃焼のもたらす滅びの赤光を散乱させる。赤の滅びから逃亡し、中心柱の喪失した住み家から逃走する蒼白者は沈黙の内言をこのうえなく寂しい内界の荒野にたたずむ冷凍庫に沈め、格納するしかない。

注Ⅱ青い真珠は始原的要素のエネルギーを介在させて生成され、二

十世紀までは実在しなかった青薔薇もパンジーの青を薔薇の遺伝子に組み込み二十一世紀に入って生成された。

◆シンゾウさん

大橋愛由等

老いたトカゲが明日捕食されるだろうと自ら予告したことではじまったその朝は海から吹きつける南風に乗ってやってきた旅風がひと晩をすごしたその小谷で起き上がりぎわに祠から声をかけられこの小谷には神像が陰伏しているので捜し出してほしいとの訴えに旅風はどうしてもシンゾウさんとして聞き取れないのでうつろに応じているとその様子を見ていたつがいの鴉たちが風のいのちを狙う算段をしようと顔を見合わせているのにも気づかず旅風は虫食いで散々に孔だらけになつた桜葉をじつとながめ光を透過させて孔の模様から文字を読み取りその小谷に春から夏にかけて惹起した物語が記述されていることを知りその葉文には今月から〈吽形〉が黙してしまったのだと木々と鳥たちと虫たちが噂していると書かれていてそういえばこの小谷に来る前の沖島の〈吽形〉もともと無口で小言しか言わかったのがとうとう今月から黙してしまったと知っていたので〈吽形〉が一度黙してしまうと何年続くか分からないためにこの黙のありように心のきしみを覚える旅風はだから今年は青葉木蒐がまだ渡ってこないのだろうかと思いつけて考えていると背後に鴉たちの邪視を感じたのでそろそろこの小谷を抜けだし峯を三つ超えた廢地に立っている石碑に対して北斜面すべての葉群れを動かして旅風の前世だった鉄塔から見た光景を詠って聴かせようと朝陽を浴びながらそろりと動き出すと〈吽形〉の黙の蔭が山を超えていく様子がうかがえるのであった

さまざまの星座詩学

安西佐有理

第三回 獅子座

T・E・ロレンス（「アラビアのロレンス」）

Thomas Edward Lawrence

一八八八年八月一六日〜一九三五年五月一九日 ウェールズ、トレマドック生
 【西洋占星術プロフィール】太陽 獅子座（水星、金星と合）、火星、木星、海
 王星と九〇度）、月 射手座、火星 蠍座（水星と九〇度）、木星 蠍座（金
 星と九〇度）、土星 獅子座（水星と合）、天王星 天秤座、海王星・冥王星

オートバイか、卵料理か、兵隊について（英国の田園地帯でもいい）、文学アンソロジーを編むとすれば、ぜひとも推したい本がある。アラビアのロレンスこと、T・E・ロレンスが書いた『造幣所(The Mint)』だ。ロレンスが、オスマン帝国に対する「アラブの反乱」への支援と、現在にまで続くことになる中東混乱に関与したあげく人間や政治への幻滅を深め、無名の一兵卒として英国軍に入隊した時期の経験が淡々と、しかし鮮烈な魅力を織り込んで、綴られている。人間を貨幣のごとく均質な兵士にする軍隊生活を描写しているはずが、乾いた集団生活には納まらない速度や感触が顔を出す。ページからは、機械に通じた軍隊仲間にも羨望される高性能オートバイ、ブラフ・シューペリアが「ボア」(雷の子の意「ボアネルゲス」を略した愛称と親しく呼び慣らされ、乗り手と相思相愛で飛ぶごとく走る時の、モーターの振動や生き物を超えた實在、耳を掠り目に飛び込む風の感触が、こちらの肌伝わる。そして田舎道の遠出で手に入った卵が、駐屯地のくすんだ酒保の食糧とは大違いの健やかさで、熱いフライパンの

つど気になった詩や断片を一二篇まで書きためた、赤い革装の手帖だった。詞華集の存在や題名は、生前自ら知人たちに明かしていたが、編集出版されたのは一九七一年になってからだ。

題名を意地悪く訳せば、『二流集成』となるかもしれないし、もしかしてロレンス本人が自嘲的にその意味合いをもたせていたかもしれないが、『古今短調詩(私)撰』とも呼べば、彼の意図にも内容にも近づく気がする。「短調で書かれていること、歌ごころがあること」という条件で集められた詩は、失われたものへの思慕、喪失のテーマのバリエーションで、正直なところ、文学的に瞠目すべき選択や内容は疑わしい。ロレンス自ら「金言のエクレア」、「六人を胸悪くさせるほど砂糖たっぷり」と軽口を言うほどで、現代からすれば被害は六人に止まらない甘口と思える詩も多々ある。ロレンスは『知恵の七柱』で、天国があるとすれば「誰にも邪魔されず、柔らかい肘掛け椅子と書見台、キャスロン書体で厚手の紙に印刷された詩の全集があるところ」だと記しているが、砂漠の戦闘の終局では（おそらく薄手の紙の）『オックスフォード英詩選集』を携行して読み、『マイノリティーズ』にもそこから抜き書きした作品があるから、彼にとつての「詩」の、新奇な刺激より古典の滑らかさ、さらには慰めとしての必需品という一面は明快だ。

ところが、ただの感傷的な通俗趣味かといえ、どうも違う。同書所収詩の出どころは後世の研究・編集で明らかにされてはいるが、手帖自体には題名も作者名も、寸評もない。「大詩人の小品、無名詩人の佳作」というなら、『ファウスト』、『クブラカーン』、『鎖を解かれたプロメテウス』、長さでは小品としても「イニスフリーの湖島」など、当時も今も文学史上の巨人による名作扱いされるものは、どちらなのか。ウィリアム・モリスを何篇も選ぶのは手放しに高評価している証ではなく、別のところ、モリスに「不完全ゆえの魅力と慰め」があると宣言しているのはどういうことか。

全き個人としての極限で他者の詩を読み、手で書き留める行為の上では、詩がどう書かれ、世間や作者にとつてどんな位置づけかのみならず、読み手個人が「優れた詩」と評価するかさえどうでもよい。詩のイメージや表現が折々の出来事や心情に共鳴したり、自分の言葉を代弁していると思えるかにだけ意味があると彼は考えたのだらうし、完璧さより脆さを認識させずにおれない言葉の力と快楽に取って目を背けなかった。ゆかしく

上でジュツと音を立てるのも聞こえてくる。『造幣所』には實在の士官が登場するし、兵隊言葉の粗さは、後にイギリスで出版された普及版で長らく伏せ字(空欄)になっていたほどだから、ロレンス本人は、生存中には発表できないと考えていたのだが。

獅子座には、遊ぶ子どものような熱狂と冷めやすさや、華やかに注目をあつめる舞台俳優のイメージがある。けれどもロレンスが考古学者、情報将校、ゲリラ戦術家、外交家や技術者、翻訳者・文筆家といった多様な顔のそれぞれで力を発揮したのは、賑々しさとは正反対の、地味で忍耐を要したり、ひそかに隠されたありようにひかれていく面が否定もできず同居していたからこそと見える。その分裂は、彼の底流に暗く流れる真実でありつつ、獅子座として進んで被った「役柄の仮面」でもあろうと、占星術の徒は木星や土星の位置を見ながら想像する。

もちろん獅子座らしい、憎めないお茶目さもなくなりはない。『造幣所』や、アラビアでの二年間を著した大作『知恵の七柱』など自伝的記録文学や書簡では、ロレンスが困難、ひいては生命の危機に直面した際、自身もふくめた状況を戯画化して、冷静で諦観した防御とも破壊的なまげずぎらいともとれるユーモアが発揮される。あえて自覚的に自己顕示のポーズをとりながら「またやつちやつた」と含羞を覗かせるようなところもある。そんな自意識過剰が、異論はあるだろうが、どこか可愛いらしく見える。それを星に投影すれば、本質をあらわす太陽、言葉や知性をつかさどる若々しい水星に、美的志向や魅力を象徴する金星と、抑制を教えようとする老いた孤独な知恵者たる土星が共に寄り添っていたり、感情を支配する月が、獅子座と同様にのびのびした火の星座・射手座に位置する図になることに、後付けだが膝を打つ。

だが獅子座につきまとう、無邪気や誇りゆえの虚や然然に結びつくものとして特に思い出されたのは、ロレンス自身の著作でもなく、彼の歴史的評価―植民地主義者たちの「グレート・ゲーム」に利用され、秘密の政治取引にも後に例をみない純粹さと慎重深さの発揮を試みたが破滅させられたとか（ハンナ・アーレント）、要は三枚舌外交家のオリエンタリストだとか（スレイマン・ムーサ、エドワード・サイード）でもない。『マイノリティーズ(Minorities)』と題された、彼の選になる極私的な詞華集のことだ。

『マイノリティーズ』は『造幣所』以上に、そもそも出版を意図されておらず、ロレンスがイギリス帰国後一九一九年から八年間にわたり、そのアナログな『マイノリティーズ』は成立の核心で、詩の存在理由や読者への作用・読者の作用といった「問題」に向いて立っており、ナイーブさと、だからこそ澄んだリアリティは、大時代の教養主義的な備忘録（コモンプレイス・ブック）よりも、読者＝編集・記録者とせいぜい心許せる数少ない親友だけがパスワードを共有する半公開ブログを連想させる。

ロレンスは生涯、詩を愛読したが、ロマン派に留まっていたわけではなく、『マイノリティーズ』には反戦詩で知られる同世代のジークフリード・サスンや年若いロバート・グレーヴスの作品も書き留められているし、後年はさらに若いドライな世代のW・H・オーデンらの詩も、同時代人としての批評眼をもって読んでいたようだ。彼が軍隊生活の合間に書きものをして過ごした小さな隠れ家クラウズ・ヒルは、まさに地上の天国として設えられた。客を迎えても料理は暖炉で温めて出す缶詰、寝具は自分用と客用の寝袋のみと、質素・禁欲・合理主義に貫かれている一方、当時としては贅沢な蓄音機とレコードの他、一二五〇冊あまりの本が並び、そのうち詩集は三〇〇冊以上あったという。常人としてはスパルタ式シンブルライフに憧れつつ、自分の部屋にはミニキッチンとトイレも欲張りたいたが、たしかに、相当な天国であり、ロレンスはそこに相応しい住人だったと思える。

彼が意義ある表現を追求できる手ごたえを持つに至ったのは詩でなく散文だった、なにし

ろ、あのオートバイや卵の描写の、散文か詩か、喩か否かを超越した、せつない強度。T・E・ロレンスとは、「書かない、書けない詩人」でもあったのかもしれない。

※写真は『マイノリティーズ』よりロレンス自筆、サスンの詩。

47

Why do you lie with your legs ungainly huddled,
 And one arm bent across your sullen, cold,
 Exhausted face? It hurts my heart to watch you,
 Deep-shadow'd from the candle's guttering gold;
 And you wonder why I shake you by the shoulder;
 Drowsy, you mumble and sigh and turn your head ...
 You are too young to fall asleep for ever;
 And when you sleep you remind me of the dead.

Why do you lie with your legs ungainly huddled,
 And one arm bent across your sullen, cold
 Exhausted face? It hurts my heart to watch you,
 Deep-shadow'd from the candle's guttering gold:
 And you wonder why I shake you by the shoulder;
 Drowsy, you mumble and sigh and turn your head ...
 You are too young to fall asleep for ever;
 And when you sleep you remind me of the dead.

◆連星

富 哲世

喉の奥につかえていた悲しみの錘が
いま嘆きを抱いてストンと彗星のように
深い井戸の奥へ消えていった

星を誘う
井戸の底の底の

濡れた砂の眠っている
夜の床

どんなのしりも届かないくらい清く平和なところへ
ようやくきみもたどり着けた
(嘆きの深さは恨みの重さと同じだから)

わたしたちはこれでまた新しく
離ればなれになった

これでまた新しい明日の苦しみと
今日の慰めを生きるしかなかった

ぼくのひとりはきみのひとりだ

ありがとう

◆生活者

月村香

レモンが麻薬のように出回りその一顧をわ
たしが偶然手にするときわたしは口を閉ざ
しもう何も言わないそれが何となくフラン
ス人ぼくっていいなぜならわたしは二言三
言ならフランス語を話すからだメロンが蜜
月を超えてわたしの瞳の欲求を満たすとき
わたしはお腹をこわしていますなどと野暮
なことは言わないでしっかり銀行に向い
てひと月分の生活費を引き出してしまわな
ければならないそれからやつと果物を買
いにゆくのだ

◆余はいかにして猫が月の化身で あることを信仰するに至ったか

千田草介

具だくさんの味噌汁のなかに子午線の切れ端が七十五本も入っていたので、とても食べきれないと思つて半分ほど猫まんまに分けてやったのです。うちはもう飼ひ猫がお隠れになくなつて久しいのですが、巡礼の野良猫どもがのぞいていたりするものですから、お接待してやるのです。まさかそれで猫に恨まれることになるとは思ひもしませんでした。東西に行きたいのに南北にしか歩けなくなつたじゃないかというのです。おれたちは北アフリカからユーラシアの東西交易路をつたつて経文とともにいるはこの東の果ての島までやつてきた種族なのだから南北の移動は意に沿わない。東西に動くなら地球を何周しようが多少の寒暖はあつても辛抱できる範囲におさまるが、南北となるとそうはいかない。北極熊やペンギンがいるところでは凍え死にするほかない。死なずにいようと思つたら電気炬燵を極地までもつていくしかない、と、チャンドラというオスのトラ猫が言います。猫どもは経文ばかりか炬燵といつしよにこの島まで来たんじゃないかとかねがね私は思つていたぐらいですから、彼の言ひ分には反論できません。どういうからくりでか味噌汁の具のために彼は身体の舵がきかなくなつてしまつたのだと思つて、いつしよに加古川線、福知山線、神戸電鉄で大回りをして(というのも、まともに東西に動くといふ死にしようになると猫が言うものですから適宜に南北移動を織り交ぜなくてはならないのです)、元町の場末で古ぼけた小さな舵輪をさがしました。それを彼にとりつけることで、ようやく子午線の副作用はおさまつたのです。東西に動けるようになったから明石へ行つて玉子焼きを食べようかと考えつつ海岸通りを歩いてみると、東のほうからまさに脳裏にあつたものとそっくりの月のぼつてきました。おれたちが西から東へ来たから、あれが東から西へ運行するんだ、そういうふうには釣合ひがとれているんだ、と猫が言いました。

◆あけやらぬ みずのゆめ

福田知子

大きな落雷の跡にあなたは生まれた

小さな小さないくつもの水溜り そのひとつ

ひらいた睡蓮の花びら その縁取りを光がすり抜けるので

明けの明星がすぐそばを横切ったことが分かる

フィルターのよくな時間という網があつて

その網目から微かに零れ落ちる淡い光の泪

そのわずかの水量を私は決して見逃さないだろう

車椅子を押す父の後ろ姿

水藻を避けるように朝夕散りばめる

摺り合わせたゆびとゆびの間にも網目があつて

細かいフレーク状になって透け 反射する

下り坂にさしかかる ひやりとするゆび

斜めに引いたからだを降り始めた雨が濡らしていく

幾度も幾度も雷鳴が轟き

豪雨で世界は白っぽくなって風景が見えない

メダカは水面すれすれを泳いでいる

天を向いたメダカの眼に映る世界はいつもさかさま

鉢に顔を寄せて雷鳴のそらを一瞥し水底に向かう

水藻に透ける光を潜って水底にかえっていく

父は母の車椅子を押しながら空を見上げる

眼鏡に水滴が降りかかり雨だとわかる

はやく病室に戻らねば：

坂道に差しかかる

車椅子を支える握力

この掌の力が萎えるのは遠い日ではないだろう：

通い慣れたバス停にいる

いつものように母の下着が入ったりリュックを背負っている父と

日本語のものには数えるほどにも出会っていない。

ミシヨは大の旅行家でもあり、1920年には五本マストの小帆船に水夫として乗り込み、アムステルダムから南北アメリカを回って以来、各洲をめぐる世界旅行を数度にわたって試みていて、その経験に基づき『エクアドル（1929）』『および、この『アジアにおける一野蛮人（1933）』を書いている。『一野蛮人』とは間違いなくミシヨ自身のことだが、これは詩人が1930年から31年にかけてインド、シナ、マレーとアジア諸国を旅行したときのエッセイ風旅行記である。ただ、珍しい風景とかエキゾチックな風習、生活様式の描写というよりは、人々の内面的傾向や文明的特質についてヨーロッパの思考とは異なる非ヨーロッパ的世界の全く新しい発見として共感、あるいは反感がユーモアをこめて記されている。

ミシヨは後に、今「わたしはつきりと嫌った日本は、わたしにとってほとんど親愛なものになってきた(S.211)」と書いているが、アジア滞在中ひとり日本については「悪しき印象」を持ったようだ。《この世界のすべてのものがわれわれの心を傷つけるのは、われわれが「極楽」にいるからなのだ。極楽の外には人を苦しめるものは何一つない。なぜなら、そこには、問題になりうるようなものが何一つないからだ》と、当時小海氏が訳した「日本の女流詩人小町」の「魅力的なことば」(S.204)を、そのことの言訳にしたいと思うと添えている。それでもわたしはその原典がわからず、わかるのはこれがヨーロッパ的なイロニーと自己批判であろうということである。大陸から来日した当初

ミシヨは気候、自然、島国的心的特性、宗教、囚人のように見える国民、俳優、女給等日本のすべてが気に入らなかつたようである。それは、しかし「叡智を欠き素朴さと深さに乏しく、くそまじめで、玩具や新しいものが好きなくせに楽

しむということがなかなかできず、野心家で、浅薄な国民。彼らが、我々西欧の悪と、我々西欧の文明とに行き着くのが、今からはつきりと見えるのだ(S.207)」という点で、1930年代という時代を考慮しても、2013年現在においても、実際そのような状況が重なるようになってくるような気がする。ミシヨは日本のなかに自己を見ているのだと思う。

如何なる旅人であつても、異国の異国性や異質性をやりこめたり拒絶したり、ましてや、やっぱり故郷が一番いいとか自分は何かを成し遂げたと納得するために、旅行をしているのではなない。当然ではあるが、ミシヨは一貫してヨーロッパ人の視座から観光もしくは観察された心象を語っている。その視座から「自分自身とは違う不当な顔を持つているものは誰もない。／また戦争が起こるだろうか？自分の姿を見つめるのだ、ヨーロッパ人たちよ、自分の姿を見つめるがいい。／君たちの顔の中には、平和でおだやかさが全くない。／すべてが戦いであり、欲望であり、貪欲さだ。平和さでさえも、君たちは荒々しく欲している。(S.22)」と結ぶのである。

そしてわたしはといえば、当市の観光局が日本からの旅行者向けに発行しているガイドマップに道を探ねている人を見かけると、こんな風に他者から自己に戻ってくる旅の視座を逆方向に想ったりもするのである、もちろん言葉も聞きたくて立ち止まっ

先日、旧市街のほうに行くときレジデント宮殿の手前で日本の団体旅行の一行を久々に見かけた。訪問者が減少していることは聞いていたし、わたし自身、居住地で旧市街に足を向けることも少なくなっていたのも理由であるが、久しく眼にしていなかった風景だったので、聞こえてくる日本語に思わず立ち止まった。

当市は所謂ドイツ・ロマンティック街道の北の入り口として知られているが、現地旅行ガイドをしている知人に聞くと、日本からの観光客を乗せたバスはもともとフランクフルト空港から主要観光地であるローテンブルグやノイシュヴァンシュタイン城に向かうツアーのトイレ休憩代わりに寄ることのほうが多く、団体さんの通訳・案内といった仕事はそれほど頻繁にはないという。また近年は、ロマンティック街道だけでは物足りずに、なかにはツエルマット、ローマ、パリなどを含めて一週間ほどで回るツアーを組まないと集客できず、ドイツ語旅行案内では「マインの真珠」と謳われている当市を観る日本人はいっそう少なくなったという。

以前はアジアの旅行者がれば遠目からでも直ちに国籍が判別できたが、近年ではアジア人である自分が見ても言葉听不懂な限り、持ち物や行動様式では一目瞭然ということはなくなってしまった。当然、旅行の様式も多様化されているだろう。昨日などは仕事帰りに駅からの道を歩いていると、背後からトランクを牽く音とともに、道案内をしてくれるドイツ人と英語で話す若い日本人女性の声が聞こえ(振り返らなかつたが、発音や間のとり方、途中にふふっと笑ったりする感じが日本語以外の何物でもなく)もちろん昔から一人旅、卒業旅行、ホームステイや留学、出張といった旅の多様さはあつたが、団体旅行自体は減少している感がある(とはいへ、年に何度か乗る飛行機では常に添乗員さんがあちこち飛び回っておられる)。個人で異国に滞在したその若い女性は、イギリスに五日間いたと言っていたが、帰国後きつと、ヨーロッパ人体験をよかつたと報告するのだろう。

詩人通りより／7 ヨーロッパにおける一野蛮人

ーアンリ・ミシヨに想う

岩脇リーベル豊美

話は跳ぶが、もう半年ほど前のこと、退官した教授が研究室においていた膨大な量の図書を分別し請求記号を授けるといふ作業をしていたら、アンリ・ミシヨ(1899-1986)『アジアにおける一野蛮人』(小海永二訳 彌生書房1970年)とともに、ロルカ訳の眩燈社版や小海氏自身の詩集等、相当数が姿を現した。嬉しくなって自室に運び込んで、もう暫く覗きたいと思い、請求記号は未だ付けていないままである。ミシヨはドイツ語訳も出版されているが、正直に言うと、名前を知っているぐらいの詩人であつた。日本でも近年、詩訳のみではなく、彼の絵画作品の展覧会や美術館も開設されているとうことを最近知った。ドゥルーズやフーコーとの関連でその思考の哲学的考察も行われているようである。ただ、探し方が不十分なのだろうが、この著作に言及している

◆旅立たれたあなたへ

川田あひる

落下する
銀杏の実が
カップルであるように
旅立つとき
手を
握ってもらいたいものでしょう
そばにだれも居なかった
あなた
さみしかったでしょう
会いたい方が
いましたね
わたしは
いま、身近な詩人の
詩のフレーズを
思います
あなたの胸の
空席に
鳴が
舞い降りるでしょう
そして
わたしは
喫茶店に出かけ

あなたの好きだった席に
腰かけ
あなたがよく飲んでおられた
ミルクティを
甘く
マスターと
あなたが
ほら
入ってこられるみたいと
お話します
あなたは
わたしの胸の
空席に
黒いモヘアの
帽子を
おいて
もう、
念願の
佐渡島へ
行かれましたか
キラキラ
輝く
海原へ
また、
お会いしましょう

注 寺岡良信「出棺」より
「死んだ水夫の胸の空席にカモメは舞い降りた」の引用があります

◆開かれた日

高谷和幸

6月4日
六月の黄色い花が見える窓から、わたしたちはその手前にいる開花しない壺です。あなたは、鎮守の樹々の間でゆがんだ自画像究極の進化をとげる)にも記憶のある装置がはたらいっているんだわ、と耳もとで可笑しそうにわらう。ワンピースに黄色い花をつけて、あなたはどこにでもある窓の、その向こうで開いている。見えるよね。「うん。猿に似ているみたい。」刈りとられた花に包まれたふざいのひとをあなたためてみたい。あなたが(椅子に腰かけていた)読んだ青い聖書のことばが、わたしたち(痩せた壺のように立っていた)の肩さぎにただよってはぎえていく。

(目に見えるものがほかでもなく、
そこにあるのだろうか)

「とまれ。」価値交換するけむりがけむるるすに、台所の窓を押し開けた猫を追いかけてあなたは飛び出しました。引き攀つて、ほら、逃げそびれるけむり。可哀そうなビッグミー族の猫ども。復活したら誰の骨に戻るのだろう。一冊の余白に書かれたおもさを、ことばを色のあるいきものにかえて、われわれの壺に棲むカメレオンが読んでいる。六月の黄色いひかり。

*
7月8日
オレンジのツートンの、あの電車に乗ってみたかった。いつも目の前を通り過ぎるばかりで、窓から君の後ろ姿が見える。また会ったね。もう時計の針なんてどちらに振れてもいいように思う。すっかり君の身支度は整ったみたいだし、まぶたが降りる少しの闇の境に、椅子にほのかな気配を残していくのは君の気遣いだったか。

「いつか」が嫌いな男が話している。第三世界の次にくる第四世界は記憶が消えてすべての死者たちがよみがえるらしい。「いつか」が好きな女がうなづく。ほんとうの色が見たいわ。

True Colors

「こんにちは」君は神様のプロバガンダだと思ったことはない。「ご存知ですか」未来はどこか遠くにあるってことだろう。「いいえ、近くに、どこにでもあつて見えない」このパンフレットを読みなさい、つてこと。「何ページ(語んじて)に書いておきました」……ヌースは停止している。
うそつき。

ヴァンス礼拝堂のマチスの陶板壁画を君に見せたことがあつた。神は停止した鞆だが、すばやく動いている幅がわたしたちには見えない。だからとりあえず何にでも数字をつけておかなければならない。数字は停止しながら動いている時間のすがただが、それがわたしたちの垂れ流している冒、なんだ。なんて愚かしい芸術論とともに。

あなたには贖えないと聞こえた

あの時、僕は病んでいて、昼間から酒を飲まないではおれなかつた。「いらつしやい」ビールをテーブルに置くと、君はすぐに株式投資に夢中になった。数字と未来の話をどう聞いたのかな。よく分からいけどヘーゲルが嫌いなものが好きになりたいと思つた。まだ椅子があつて。

*
時の分離と振られた数字が
「一壁面、一空間、一場面」
殺しに来てほしいと言われたから、
書いていることはたとえ偶像でも信じることと同じだから
留まる点を失い水平に横滑りしていくような不確実感から
一致した悲劇のアールへ

◆ふたつの歌

野口裕

三次元世界のさだめ　しかあれど固く結んだ紐がほどけぬ

平行、直交、交差、ねじれと
二本の紐の布置はさまさま
それぞれの係わりがそれぞれのアレゴリーを生み出す

平行は並んで進む二台の電車
やあやあと言わぬばかりに
あちらの座席あちらの吊革見とれて
こちらの吊革に腕一本

直交は十字かT字か
交点は常に交歓の場
バイオリンの弦に当たる弓
そしてギターに触れる指

交差はX
十と異なる角度のまじわりは
歓喜の高まり

それとも相手への疑問
一瞬触れて互いに食い入る波紋は
交差したまま広がりつつ
かすかにひとつに溶けゆく

ねじれに至り
紐は空中に飛び出す
まじりあわぬと悟ったもの同士はそうせざるを得ぬが
さびしさにふれあいを求め
度が過ぎて
失敗した綾取りは固く結びついたままとなり
アレゴリーの森に閉じ込められる

結びついた紐を救うものはいないように見える
だが絶え間なく風雨はやってきて
やさしく紐をときほぐし
何年、何十年、何億年かかろうが
たゆまず紐をなでさすれば
ついに紐帯は解放される

それは救いではないかも知れない
しかし
やったことを知らぬままに
風はまた雨を生み
雨は雨で流れ去ってゆく

三次元世界のさだめ　しかあれど入ったら出る水のさびしさ

◆青い服と白い服を着た人たち

中堂けいこ

ブザーを押すところからともなく人が現れて、鍵を使ってドアを開けた。片手でドアを外側に抑えながら私たちが入る間、古時計のメロディーが鳴り続けている。廊下の右手と左手に分かれて子供の頭くらいの高さの囲いがあり、囲いの中の人たちは青い服を着て、私たち進入者をじっと眺めている。すらりと痩せた男たちで一緒に同じ姿勢で同じような顔つきなので、誰が誰か判別がつかない。正面の素通しのガラス窓の中にいる人たちは白い服を着て、皆が忙しげに作業をしている。ドアの鍵を開けた人はその中の一人だ。私たちはそこからすぐ隣の小部屋に案内され、人々から隠されて、声も聞こえないような、長い矩形の部屋に入った。正面に机がありパソコンとボールペンが乗っている。形のまちまちな椅子が何客かあったので、私たちは其々の椅子にすわった。部屋の片側の壁に沿って真っ白な布に包まれた寝台が置いてある。

ここでは様々な問答が繰り返されてうんざりするくらいだったが、一人がしつかりと質問に耐えて、私たちは椅子を押ししたり、サインしたり、手洗いをつかったりした。手洗いは鍵が外側からかけられた。壁や床は象牙色の塗料で覆われて音が吸い込まれるようだ。皆が静かに会話している。ときどきどこかわからない場所で鈍い響きが起こり、囲いの中の青い服の人たちはいつせいに顔を上げて不安な目つきをする。囲いの中に大きなアルマイトの薬缶があった。囲いは子供の背の高さの押し扉がついている。白い服を着た男がポケットから鎖でつながった鍵を出して、扉を開け薬缶に近づいた。ほんの一瞬の動きで鍵をポケットに仕舞い、優しく微笑んでいる。ぼやけたような食べ物匂いがする。

すべての手続きが終わって、私たちが入り口のドアの前に立つと先ほどの白い服を着た男が小走りにやってきて、にこやかに鍵を開けた。動作が女に見えてしまう。

建物の玄関にカレーの市民のジャン・デールの彫刻が立っていた。ブロンズの眼は伏し目がちに、両腕にカレーの城塞都市の鍵を持っている。



金里博氏

里博氏の在日の叫び 詩集『三島の悲歌』

京都在住の在日詩人・金里博氏が、まろうど社から詩集『三島の悲歌』(A4判上製本、本文三三四頁)を上梓した。本書はまろど社から、里博氏の著書のひとつとなるだろう。

「三島」とは日本の異名。もともとは朝鮮半島や中国沿岸を荒らしまわった前期倭寇の出撃地が対馬、壹岐、五島列島が多かったことから、これらの地域が意識され、この「三島」がいつのまにか日本を指すようになった。もちろん、この呼称には日本に対する異和の響きが含まれているが、この「三島」に居住せざるを得ない在日としての慟哭が込められていることを見逃してはならない。

本書は、左ページにハンゲルの原文、右ページに上野都氏による日本語による対訳が付されているのが大きな特徴となっている(里博氏は母国語ハンゲルで表現することにこだわっている)。叙事詩と謳っているが、表現として書かれた詩句は、激しい感情表現の累積であり、こうした叙情性の積み重ね(心情の発露という事実・コト)が積み重なっていくことで叙事詩が成っていくという詩のカタチを(叙事と抒情の二元論的発想に拘泥している)私に提示してくれるのだ。

この詩集に書かれたのは、金里博氏の生き方のすべてであり、在日というありようそのものである。タイトルである「悲歌」の(悲しみ)という感情表出の中に、在日の根元的なありようのすべてを収斂させようとしている。

その(悲しみ)の淵源のひとつに分断の現実がある。「だ

が、故国はいつまでも待っていると/信念を持っている者たちの中で育ち/故郷は無くとも/故国の存在を微塵にも疑わず/強く信じている世代こそ/間違ひなく過ぎし日の我らだった」

219 故国は日本の敗戦によって植民地から解放され、民族としても人間としても全的に奪還されなければならないものであり、かつ故国は統一された(韓の国)でなければならなかった。しかし国家も分断されたままであり、在日という困難は解消されていない。「分断されている祖国は手足をもがれた龍さながら/互いに引き離された民族は根の無い木/分断の祖国を抱く同胞は亡国の民/民びとはみな夢遊病にかかっているようなもの」p171

そうしたなかで在日はひとつの大きな現実である。「三島の血統に変わった人間は/いまや根を張り/やがて すべての小枝は/権になり木蓮になり/躑躅になり連翹になり/松の木になり、しだれ桜になるだろう。」p179 そして愛着もある。「有態に言うならば/三島の時間は捨てるに惜しい/わが半島の時間が何であろうと/懐かしく情があり温かい」p215

故国を思う気持ちと、在日という裂け目に生きながら三島に対して愛憎半ばする表現を綴っていくこの詩集のモードが大きく変わるのが、故郷・韓国への墓参であった。「30年ぶり、50年ぶりに故郷に錦を飾ってみても/「糞胞」「大胞」「婦胞」よと/心ない言葉聞き冷遇される/これはまた 誰の戯言だ!」p233 「訪ねた場所は間違ひなく/父母の在所、祖先たちの故地/だが今となつては五尺のこの身を知る者はいず/どうにも身の置き所もなく/失望と絶望で踵を返すしかなかった悲哀——」p237 故国・故郷への思いが人一倍強く、その思いを糧に表現してきた里博氏である。故郷で受けた心の傷は浅くはなかったろう。

そして里博氏は続けるのである。「三島という島の国は/母国ではないが 我が故里なり」p239 と心を鎮めながらも「三島の地の我らの歴史は/墓もなく、いや、そうではない/生きていく所自体が墓場、奥城よ」p281 果てることのない在日の現実と悲しみからやり逃れることが出来ないのだ。

朝鮮民族といっても本国に住む人たちはばかりではない。海外同胞(日本、米国、ロシア、豪州、欧州、中国・朝鮮族)もいて、それぞれが独自の歴史と心情を持っている。そうした多様性を統べるための同一性の根拠として、里博氏は、朝鮮民族の始祖である檀君に依拠しようとするのだ。

詩と評論

月刊『Melange』VOL.83
めらんじゅ

2013年07月28日 通巻83号
発行所/月刊「Melange」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集人/大橋愛由等(『Melange』同人)
Mobile 090-5069-1840
maroad66454@gmail.com
定価 500円(税込)